

<中間テスト>

*筆者が南アジアでのフィールドワークで遭遇した様々な体験の中で、いかに対処したらいいのか、いまだに悩んでいる事柄が九つある。以下に示す九つの悩みに対して皆さんの適切なアドバイスを求めます。

1. かつてインド・バングラに入国した際、私はよく税関でひっかかり、他のメンバーに迷惑をかけた。それはビデオとかカメラとか持ち物が多いせいもあったが、役人に絶対ワイロを渡さなかったからである。かれらの要求に従って小銭、タバコ、フィルムなどを渡せばすんなり通過できる。そうするようにすすめられもした。こんな時、どうしたらいいのでしょうか。

2. 町を歩けば必ず袖をひっぱられ、物乞いにあう。拒否するか、あげるか、あるいは逃げるか。こんな時、どうしたらいいのでしょうか。

3. 87年の大洪水の時、馴染みの壺造り・竹箕作りの村が水没したと聞き、世話になった14軒分の米を用意して救援に出かけた。それを聞きつけた近隣の人たちが「どうして我々にはくれないのだ」といいながら、詰め寄ってきた。私は危険を感じ必死に逃げた。こんな時、どうしたらいいのでしょうか。

4. アシスタントに対してのお礼（謝金以外）をどうしたらいいか。私は2～3泊の旅行につれて行ってやりたいと言ったが、バングラでは「それはやりすぎ」といって反対され実現できなかった。コルカタでは1人で入り込んでいたが故に、ベンガル湾沿いの海水浴場に遊びに行くことができた。みなさんならどうしますか。

5. 私は、ノンベジのレストランへアシスタントのバジュパイ兄弟を連れて行き、彼らが厳格な菜食主義者を守っている家の一員であることを知りつつも、卵、ヤギ、ニワトリの肉をすすめた。兄 (Promad) は卵まで、弟 (Vinod) はすべてを食べた。あいての文化を破壊したことになる。こんなことをしていいのだろうか。

6. オート力車、サイクル力車なら平気でどんどん乗る。しかし、人力車にはちょっと抵抗を感じず。年配の人が汗を流し、息を切らせながら、灼熱のカルカッタを走る姿はみておれない。といっても、乗ってあげないわけにはいかない。彼らは必死に稼いでいるのだから。『歓喜の街カルカッタ』を読んでみて下さい。さて、力車に乗るとき、私は値切る癖がついてしまった。このときも年老いた力車ワラ（引き）をつかまえ、値切り、しかも私よりも大きい大学院生と2人が乗り込んだ。少々後悔はしている。みなさんならどうしますか。

7. 現地の人にとって土産としてもっとも喜ばれるのは、写真である。県庁所在都市くらいの町には即日、遅くて翌日仕上げの写真屋がある。できればは良い。彼らを写した写真

を次に訪問するときを持って行くのである。日本と同じくらいの値段だから一般の人々にはちょっと手が出ない。さて、私より先に村に入った先生が居候した家の人に多量に写真をプレゼントした。そして、喜ばれ、調査の成果もあがった。しかし、二つ問題が生じた。一つは、後に入った私にアシスタントが写真を要求しまくるのである。私は一部は彼の要求に応え、一部は帰国後郵送してあげた。他の一つは、アシスタントの家と、写真をもらえなかった他の家との間に何か違和感、断絶が生じたように思えた事である。というのは、ある日、その先生が誘拐されたというデマがある村人から彼の家にとばされたからである。なぜこんな嫌がらせをその人がしたかは定かではないが、写真のあげすぎが原因ではなからうかと思っている。こうした写真配りに対して皆さんはどう思いますか。

8. 1月10日、午前中、アグラ城見学。午後、タージマホール見学。今晚はホテルを替えて超一流のタージビューホテルに泊まることにした。今までのインド旅行のなかで最高のホテルだ。2人で1250ルピー（約16,000円）。昨日、一昨日のインド中流ホテルの10倍以上の値段だ。彼（アシスタントのビノッド）は「2度とこんなホテルに泊まれないだろう。たとえお金があってもこんな事には使わないだろう」と、複雑な心境を語った。1階のレストランでチャイをおごった時も、「有り難いが嬉しくない」といった。普通1ルピー（約13円）で飲めるのが、ここでは20ルピーもするからだ。土産物屋で石作りのタージマホールを買ったときも彼は怒った。180ルピーを130ルピーで満足して買ったのだが、「そんなものが買えば50ルピーもかからん。騙されたのが気に入らん」という。電気も水道もトイレもない、まるで江戸時代にタイムスリップしたのではと思えた、そんな農村に住んでいる青年に、異なった世界をみせてあげようとの親切心が必ずしも彼を喜ばせなかったのである。こうした私の行動に対して皆さんはどう思いますか。

9. インドの農村で「大」をするとき、インドの人達はロタという真鍮の小瓶に水を入れ、それをもって集落のはずれの道ばた、小麦畑の中、木陰など思い思いの場所で用を足します。そして左手で水洗いします。こうした村に入ってしまった場合、あなたはどうしますか。郷に入っては郷にしたがいますか。ちり紙を使いますか。トイレのある町まではバスで2時間半かかります。その町へ通いますか。我慢し続けますか。

浄なる右手で食事を、不浄なる左手で水洗をとというのがインドの確固とした文化です。そう習ってきました。事実そうでした。ところが、昨年12月4日にみてしまったのです。その日の日記の一部を抜き書きしてみましょう。「マレーラの市図を書いた後、十数人の青年・子どもに連れられて近くの高台へあがった。小学校の敷地になっており、市の全景がよく見渡せる。つづいて給水塔に案内された。塔がみえるところに着いたら真下の水際で青年がまさに「大」をし終わるところだった。みんなに見られてあわてたのか、とっさに水でおしりをふいた。その手がなんと右手だったのです」これは余談。